

# もみの木

GRANTRAEET

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫



まちそとの森に、いっぽん、とてもかわいらしい、もみの木がありました。そのもみの木は、いいところにはえていて、日あたりはよく、風とおしも十分<sup>じゅうぶん</sup>で、ちかくには、おなかまの大きなもみの木や、はりもみの木が、ぐるりを、とりまいていました。でもこの小さなもみの木は、ただもう大きくなりたいと、そればかりねがっていました。ですから森のなかであたかいお日さまの光のあたっていることや、すずしい風の吹くことなどは、なんともおもっていませんでした。また黒いちごや、オランダいちごをつみにきて、そこいらじゅうおもしろそうにかけまわって、べちやくちやおしやべりしている百姓のこどもたちも、気にかからないようでした。こどもたちは、つばいっばい、いちごにしてしまおうと、そのあとのいちごは、わらでつないで、ほつとして、小さいもみの木のそばに、腰<sup>こし</sup>をおろしました。そして

「やあ、ずいぶんかわいいもみの木だなあ。」

と、いいいいしました。けれど、そんなことをいわれるのが、このもみの木は、いやで、いやで、なりませんでした。

つぎの年、もみの木は新芽<sup>しんめ</sup>ひとつだけはつきりのび、そのつぎの年には、つづいてまた

芽ひとつだけ大きくなりました。そんなふうで、もみの木の歳は、まいねんふえてゆく節のかずを、かぞえて見ればわかりました。

小さいもみの木は、ためいきをついて、こういいました。

「わたしも、ほかの木のように大きかったら、さぞいいだろうなあ。そうすれば、枝をうんとおぼして、たかい梢の上から、ひろい世のなかを、見わたすんだけど。そうなれば、鳥はわたしの枝に巣をかけるだろうし、風がふけば、ほかの木のように、わたしも、おうように、こつくりこつくりしてみせてやるのだからなあ。」

こんなふうでしたから、もみの木は、お日さまの光を見ても、とぶ鳥を見ても、それから、あさゆう、頭の上をすうすうながれていく、ばらいろの雲を見ても、ちつともうれしくありませんでした。

やがて冬になりました。ほうほう雪が白くつもって、きらきらかがやきました。するとどこからか一ぴきの野うさぎが、まい日のように来て、もみの木のあたまをとびこえとびこえしてあそびました。——ああ、じつにいやだったありません。——でも、それから、ふた冬とおりにすると、もみの木はかなり、せいが高くなりましたから、うさぎはもうただ、そのまわりを、びよんびよん、はねまわっているだけでした。



「ああうれしい。だんだんそだっていつて、今に大きな年をとった木になるんだ。世のなかにこんなにすばらしいことはない。」

もみの木は、こんなことを<sup>かんが</sup>考えていました。

秋になると、いつも木こりがやって来て、いちばん大きい木を二、三本きりだします。

これは、まい年のおきまりでした。そのときは、見あげるほど高い木が、どしんという大きな音をたてて、<sup>じめん</sup>地面の上にたおされました。そして枝をきりおとされ、<sup>ふと</sup>太いみきのかわをはがれ、まるはだかの、ほそっこいものにされて、とうとう、木だかなんだかわけのわからないものになると、この若いもみの木は、それをみてこわがってふるえました。けれども、それが<sup>にぐるま</sup>荷車につまれて、馬にひかれて、森を出ていくとき、もみの木はこうひとりごとをいつて、ふしぎがっていました。

みんな、どこへいくんだろう。いったいどうなるんだろう。

春になって、つばめと、こうのとりがとんで来たとき、もみの木はさっそくそのわけをたずねました。

「ねえ、ほんとにどこへつれて行かれたんでしょうね。あなたがた。とちゅうでおあいになりませんでしたか。」

つばめはなんにもしりませんでした。けれどもこのとりは、しきりとかがえていました。そしてながいくびを、がってん、がってんさせながら、こういいました。

「そうさね、わたしはしつていとおもうよ。それはね、エジプトからとんでくるとちゅう、あたらしい船ふねにたくさん、わたしは出あつたのだが、どの船にもみんな、りっぱなほばしらが立っていた。わたしはきつと、このほばしらがおまえさんのいうもみの木だとおもうのだよ。だって、それにはもみの木のおいがしていたもの。そこで、なんべんでも、わたしはおことづけをいいます。大きくなるんだ、大きくなるんだってね。」

「まあ、わたしも、遠い海をこえていけるくらいな、大きい木だったら、さぞいいだろうなあ。けれどこのとりさん、いったい海つてどんなもの。それはどんなふうに見えるでしょう。」

「そうさな、ちょっとひとくちには、とてもいえないよ。」

このとりはこういったまま、どこかへとんでいってしまいました。そのとき、空の上でお日さまの光が、しんせつにこういつてくれました。

「わかいあいだが、なによりもいいのだよ。ずんずんのびて、そだっていくわかいときほど、たのしいことはないのだよ。」

すると、風も、もみの木にやさしくせつぷんしてくれました。つゆもはらはらと、しおらしいなみだを、かけてくれました。けれどももみの木には、それかどういいうわけかわかりませんでした。

クリスマスがちかくなつてくると、わかい木がなんぼんもきりたおされました。なかには、このもみの木よりもわかい小さいのがありましたし、またおない年ぐらいのものもありました。ですからもみの木は、じぶんも早くよその世界<sup>せかい</sup>へでたがって、まいにち、気が気でありませんでした。そういうわかい木たちは、なかでも、ことに枝ぶりの美しい木でしたから、それなりきられて、車につまれて、馬にひかれて、森をでていきました。

「どこへいくんだろう。あの木たちは、みんな、わたしより小さいし、なかにはずっと小さいのもある。それからまた、なんだって、枝をきりおとされないんだろう。いったい、どこへつれていかれるんだろう。」

もみの木は、こういつてきくと、そばですずめたちが、さえずっていいました。

「しっているよ、しっているよ、町へいったとき、ぼくたちは、まどからのぞいたから、しっているよ。みんなは、そりやあすばらしいほど、りっぱになるんだよ。まどからのぞくとね、あたたかいおへやのまんなかに、小さなもみの木は、みんな立っていたよ。金<sup>きん</sup>い



ろのりんごだの、蜜のお菓子だの、おもちやだの、それから、なん百とも知れないろうそくだので、それはそれは、きれいにかざられていたつけ。」

「で、それから——。」と、もみの木は、のこらずの枝をふるわせながらたずねました。

「ねえ、それから、どうしたの。」

「うん、それからどうしたか、ぼくたちはしらないよ。とにかく、あんなきれいなものは、ほかでは見たことがないね。」

「ああ、どうかして、そんなはなばなしい運がめぐってこないかなあ。」と、もみの木は、ときような声をあげました「それこそ白い帆をかけて、とおい海をこえていくよりも、ずっとよさそうだ。ああ、いきたいな。いきたいな。はやく、クリスマスがくればいいなあ。わたしはもう、去年、つれていかれた木とおなじくらい、せいが高くなったし、すっかり大きくそだってしまった。——ああ、どうかして、はやく荷車の上に、つまれるようになればいいなあ、そして、目のさめるように、りっぱになつて、あたたかいへやに、すみたいものだなあ。だが、それからは、それからはどうなるだろう。——たぶん、それからは、もつといいことがおこるだろう。もつとおもしろいことに、ぶつかるだろう。もしそうでなければ、そんなにきれいに、わたしたちをかざっておくはずがないもの。きつ

となにか、たいしたことがおこるんだろう。すばらしいことが、やってくるんだろう。だがそれはなんだろうなあ。——なんだかわからないが、ただいきたい。ああ、たまらないぞ。もう、じぶんでじぶんがわからないんだ。」

そのときまた、風とお日さまの光とが、やさしく声をかけました。

「わたしたちのなかにいるほうがきらくだよ。このひろびろしたなかで、げんきのいい、わかいときを、十分にたのしむのがいいだよ。」

けれども、もみの木は、そんなことをきいても、ちっともうれしくありませんでした。

こうして冬が去って、夏もすぎました。もみの木はずんずんそだっていつて、いつもいっつもいきいきした、みどりの葉をかぶっていました。ですからたれも、このもみの木をみた人で、

「なんてまあきれいな木だろうね。」

と、いわないものはありませんでした。

それで、クリスマスの季節きせつになると、このもみの木は、とうとう、まつさきにきられました。そのとき、おのが、木のしんまできりこんだので、もみの木は、うめきごえを立てて、地の上にたおれました。からだじゅう、ずきずきいたんで、だんだん、気が遠くなり

ました。かんがえてみると、うれしいどころではありません。じぶんがはじめて芽を出した森の家からはなれるのは、しみじみかなしいことでした。こどものときからおなじみの、ちいさな木や花などにも、それからたぶん小鳥たちにも、もうあえないだろうとおもいました。まったく旅に出るというのは、つらいものにちがいありませんでした。

やっと、しょうきづいて見ると、もみの木は、ほかの木といっしょにわらにくるまれて、どこかのうちのにわのなかにおかれていました。そばではひとりの男がこういつていました。

「この木はすてきだなあ。これいっぱいあればたくさんだ。」

そこへはつびをきた、ふたりの男がやってきました。それでもみの木を、りっぱにかぎった、大きなへやにはこんでいきました。へやのかべにはいろいろながくが、かかっています。タイルばりの大きなだんろのそばには、ししのふたのついた、青磁のかめが、おいてありました。そこには、ゆりいすだの、きぬばりのソファだの、それから、すくなくとも、こどもたちのいいぶんどおりだとすると、百円の百倍もするえほんや、おもちゃのつている、大きなテーブルなどがありました。もみの木は、砂がいっぱいはいっている、大きなおけのなかにいれられました。けれど、たれの目にも、それはおけとは見えません

でた。それは青あおした、きれでつつまれて、うつくしい色もようのしきものの上においてありました。まあ、このさき、どんなことになるのかしら、もみの木はぶるぶるふるえていました。召使たちについて、お嬢さんたちも出てきて、もみの木のおかざりを、はじめました。枝にはいろがみをきりこまざいてつくったあみをかけました。そのあみの袋には、どれもボンボンや、キャラメルがいっぱいはいていました。金紙をかぶせたりんごや、くるみの実が、ほんとうになつていのように、ぶらさがりました。それから、青だの、赤だの、白だの、ろうそくを百本あまり、どの枝にも、どの杖にもしつかりとさしました。まるで人間かと思われるほど、くりくりした目のにんぎようが、葉と葉のあいだにぶらさがっていました。まあにんぎようなんて、もみの木は、これまでに見たことがありませんでした。――木のでつぺんには、ぴかぴか光る金紙きんがみの星をつけました。こんなにいろいろなものでかざりたてましたから、もみの木は、それこそ、見ちがえるように、りっぱになりました。

「さあ、こんばんよ。」と、その人たちは、みんないっていました。「これでこんばん、あかりがきます。」

それをきいて、もみの木はかんがえました。

「いいなあ、こんばんからだってねえ。はやくばんになって、あかりがつけばいいなあ。それからどんなことがあるだろう。森からいろいろな木があいにくるかしら。それとも、すずめたちがまどガラスのところへ、とんでくるかしら。もしかしたら、このままここで根がはえて、冬も夏もこうやってかざられたまま、立っているのかもしれない。」

そんなふうに、あれやこれやとかんがえるのも、もったもなことでした。けれども、みの木はあんまりかんがえつめたので、からだのかわが、いたくなりました。ちょうど、にんげんが、ずつうでくるしむように、木にとっては、このかわのいたいのは、かなりこまるびようきなものでした。

さて、ろうそくのあかりがつかしました。なんとというかがやかしさなのでしよう。なんというりっぱさなのでしよう。もみの木は、うれしまぎれに、枝という枝をぶるぶるさせました。そのため、いっぽんのろうそくの火がゆれて、あおい葉にもえうつりました。おかげで、かなりこげました。

「あぶないわ。」と、お嬢<sup>じょう</sup>さんたちはさげんで、あわてて火をけしました。そこでもみの木は、もうからだをふるわすこともできませんでした。こうなると、それはまったくおそろしいほどこでした。もみの木はせつかくのかざりを、ひとつもなくすまいと、しんばいし

ました。それに、あんまり明るすぎるので、ただもうぼうつとなりました。――

やがて、両びらきのとびらがさあつとあいて、こどもたちが、まるで、クリスマスの木ごとたたきおとしそうないきおいで、とびこんできました。おとなたちも、そのあとからしずかについてきました。こどもたちは、ほんのちよつとのあいだ、だまって立っていましたが、――たちまち、わあつというさわぎになって、木のまわりをおどりまわりながら、クリスマスのおくりものを、ひとつ、ひとつ、さらっていききました。

「この子たちはなにをするんだろう。なにがはじまるんだろう。」と、もみの木はかえりました。するうち、枝のところまで、ろうそくは、だんだんともえていききました。そしてひとつずつ消されてしまいました。やがて、木の枝につけてあるものを取ってもいいというおゆるしが出ました。やれやれたいへん、こどもたちは、いきなり木をめがけて、とびつきました。木はみしみしと音を立てました。もみの木のとっぺんにつけてある金紙きんの星ほしが、うまくてんじょうにしばらくつけてなかったら、きっと木は、あおむけにひっくりかえされたことでしょう。

こどもたちは、もぎ取とったりつばなおもちやを、てんでんにもって、おどりまわりました。ですからたれひとり、もう木をふりかえって見るものはありませんでした。たったひ

とり、ばあやが、木につけてあった、いちじくやりんごを、こどもたちがとりのこしていやしないかとおもって、枝のなかに首をさし<sup>くび</sup>いれて、のぞきこんだだけでした。

「おはなししてね、おはなししてね。」

こどもたちはそうさけんで、ずんぐりしたひとりの小さい人を、木のところへひつぱっていきました。その人は、木の下に腰<sup>こし</sup>をおろしてこういいました。

「よしよし、こうしていれば、みなさんはみどりの森のなかにいるようなものだ。だから、この木もうれしがって、おはなしをきくだろう。だがおはなしはひとつだけだよ。＊イウエデ・アウエデのおはなしをしようかね。それとも、だんだんからころげおちたくせに、うまく出<sup>しゅっせ</sup>世して、王女<sup>おうじよ</sup>さまをおよめさんにした、でつくりもつくりさんのおはなしをしようかね。」

＊イウエデ、アウエデ、キウエデ、カウエデ—というようにつづくことばあそび。

「イウエデ・アウエデ。」と、五六人のこどもたちはさけびました。するとほかのこどもたちは、「でつくりもつくりさん。」とさけびました。みんながそうやって、くちぐちに、わいわいいたてるので、がやがや、がやがや、おおさわぎになりました、けれども、も

みの木ばかりは、だまってこうおもっていました。

「わたしには、そうだんしてくれないのかしら。わたしは、このおなかまではないのかしら。」

なるほどおなかにはちがいないのです。けれどももみの木のおやくめは、もうすんでいました。

やがていまの人は、だんだんをころげおちたくせに、出世して、王女さまをおよめさんにした、でつくりもつくりさんのおはなしをしました。おはなしがすむと、こどもたちは、ぱちぱち手をたたいて、

「もひとつして、もひとつして。」と、さけびたてました。こどもたちはイウエデ・アウエデのおはなししてもらいたかったのですが、でつくりもつくりさんのおはなしだけで、がまんしなければなりませんでした。もみの木はびっくりしたような、それでいて、かんがえこんでいるようなようすをしていました。だって、森の鳥たちは、そんなおはなしは、ちつともしてくれませんでしたからね。

「でつくりもつくりさんは、だんだんから、ころげおちたくせに、王女さまを、およめさんにしたとき。そうだ、そうだ。それが世よのなかというものなんだ。」と、もみの木はか



んがえました。そしてあんまりつばな人が、そうはなしたんだから、それはほんとうのことにちがいないと思いました。

「そうだ、そうだ、わたしだって、だんだんからころげおちて、王女さまをおよめさんにもらうかもしれない。」

これで、あしたもまた、あかりをつけてもらって、おもちゃだの、金のくだものだから、かざられるのだと思つて、もみの木はぞくぞくしていました。

「あしたはもうふるえないぞ。こんなになりつぱになったのだから、うんとうれしそうな、とくいらしいかおをしていよう。きつとまた、でつくりもつくりさんのおはなしをしてもらえるだろうし、ことによつたら、イウエデ・アウエデのおはなしでももらえるかもしれない。」

こうしてもみの木は、じつとひと晩<sup>ばん</sup>じゅうかんがえあかしました。

つぎの朝<sup>あさ</sup>、召使たちがやってきました。

「ああ、きつともういちど、りつぱにかざりなおしてくるんだな。」と、もみの木は思いました。けれども、召使たちは、木をへやのそとへ、ひきずっていきました。そして、

はしごだんをあがつていつて、屋根<sup>やね</sup>うらのものおきのうすぐらいすみへ、ほうりあげました。そこにはまるで、お日さまの光がさして来ませんでした。

「どうしたつていうんだろう。こんなところで、なにができるんだろう。こんなところではなしをしても、なにがきこえるだろう。」と、もみの木はかんがえました。そしてかべにもたれたまま、いつまでも、あきずに、かんがえつづけていました。——もうずいぶん時間がありました。なにしろ、いく日<sup>にち</sup>となく、いく晩となく、すぎて行きましたからね。

けれども、たれひとりやつては来ませんでした。それでも、とうとうたれかが上がってきましたが、なにかふたつ三つ大きな箱<sup>はこ</sup>を、すみのほうへほうりだして行ったばかりでした。おかげで、もみの木は、その箱の下じきになって、かくれてしまいました。まあその木のいることなど、まるで、忘れられてしまったのでしよう。

「今は、そとは冬なのだ。地めんはかちかちにこおって、雪がかぶさっている。だから、あの人たちは、わたしをうえることができない。それで、わたしは春がくるまで、ここにかこわれているのだ。ほんとに、なんてかんがえぶかい人たちだろう。——ただ、ここがこんなに、うす暗<sup>ぐら</sup>いさびしいところでなければいいとおもうな。——なにしろ、野うさぎ一ぴき、はねてこないのだもの。——雪がつもって、うさぎがそばをはねまわったりする

じぶん、あの町そとの森のなかは、ずいぶん、よかったなあ。そうそう、兎うさぎがよく、あた  
まのうえをとびこえたつけ。あのときは、すいぶん、はらがたったがなあ。それも今では  
なつかしい。それにくらべては、ここの屋根うらのおそろしいほどな、さびしさといっ  
た。

「チュウ、チュウ。」

そのとき、ふと、小ねずみがなきながら、ちよろちよろとはいだしてきました。そのあ  
とから、もう一ぴきの、小ねずみが出てきました。ねずみたちは、もみの木のおいをか  
いで見て、枝のあいだを、はいまわりました。

「ひどいさむさですねえ。」と、小ねずみたちはいいました。「でもここはずいぶんいい  
ところでしょう。そうはおもいませんか、もみの木のおじいさん。」

「わたしは、そんなおじいさんじゃないぞ。」と、もみの木は少しおこっていいました。

「まだまだ、ぼくより、としをとっている木は、たくさんあるよ。」

「あなたはどこからきたの。いろんなことを知っているの。」と、小ねずみたちは、たい  
へんなにかをききたがっていました。「ねえ、もみの木さん。世のなかで、いちばんすば  
らしいところのことを、おはなししてください。あなたは、そこからきたんでしょう。そ

ら、たなの上にチーズがのつていたり、てんじょうから、ハムがぶらさがつていたり、あぶらうそくの上で、おどりをおどったりして、はいるとき、ひよろひよろ、出るとき、むつくりでつくり——、と、いうようなところにいたんでしょう。」

「どうも、そんな所は知らないね。」と、もみの木はいいました。「けれど、森のことならしっているよ。そこではお日さまの光はよくあたるし、鳥がうたをうたっているよ。」それからもみの木は、じぶんのわかったときのことを、すっかりはなしました。小ねずみは、これまでに、そんなことをちつともききませんでしたので、めずらしがつてきていました。それからあとでいいいました。

「まあずいぶんいろいろなものを、たくさん見たんですねえ。ずいぶんしあわせだったんですねえ。」

「わたしがかい。」

そういわれて、もみの木は、はじめて、いま、じぶんのはなしたことをかんがえてみました。

「なるほど、そういえばしあわせだったよ。そう、つまりあのじぶんが、わたしもいちばんしあわせだったなあ。」

それから、もみの木は、おいしいおかしや、ろうそくのあかりでかざられた、クリスマス  
スの前の晩のはなしをしました。

「まあ、ずいぶんしあわせだったのね、もみの木のおじいさん。」と、小ねずみがいま  
した。

「わたしは、そんなにおじいさんではないというのに。」と、もみの木はいいました。

「この冬、はじめて森のなかから出てきたばかりだもの。わたしは、今がさかりの年なん  
だ。ただすこしのつばにそだちすぎたかもしれない。」

「おじいさんのはなしはおもしろいね。」

と、小ねずみがいきました。

つぎの晩にも、小ねずみは、ほかに四ひきのなかまをつれて、話をききにやってきました。  
た。もみの木は、話していればいるほど、あれもこれもはつきりおもいだせました。そし  
て、こうかんがえました。

「あのじぶんは、ほんとにしあわせだったけれど、ああいうじだいがまたやってくるだろ  
う。きつとまたやってくるだろう。でつくりもつくりさんは、だんだんからころげおちた  
くせに、王女さまをおよめさんにもらった。だからわたしだって、たぶん王女さまをおよ

めさんにするかもしれない。」

それから、もみの木は、森のなかにはえていた、かわいらしい白<sup>しら</sup>かばの木のことをおもいだしました。その白かばの木は、ほんとにきれいでしたから、もみの木には、それがうつくしい王女さまのようにおもわれました。

「でつくりもつくりさんて、だれなんですか。」

と、小ねずみたちがたずねました。もみの木は、ひとつもまちがえずに、そのおはなしを、すっかりはなしてやりました。小ねずみたちは、それはそれはうれしがって、もみの木のいちばん高い枝にとびつきそうにしていました。つぎの晩には、もっと、たくさんのおねずみたちがきました。にちよう日には二ひきのおやねずみさえ出てきました。けれど、このおやねずみは、そんなおはなしは、いつこうおもしろくないといいました。そういうわねずみ小ねずみたちも、すこし、がっかりしていました。なるほど、それはせんほどおもしろくおもわれませんでしたものね。

「君のしっているお話は、それひとつきりなのかい。」と、おやねずみはいいました。

「ああ、これひとつき。」と、もみの木はこたえました。「なにしろわたしはうまれていちばんしあわせだった晩に、そのおはなしをきいたのだからね。けれど、そのときは、そ

れがそんなにしあわせだとはしらなかった。」

「ずいぶん、つまらないおはなしだなあ。君は豚ぶたのあぶらみとか、あぶらうそくというようなものはなんにもしらないのかね。たべものやのはなしは、しらないのかね。」

「しらないねえ。」と、もみの木はこたえました。

「そう。じゃあどうもありがとう。」と、おやねずみたちはいつて、なかまのところへかえっていきました。とうとう、小ねずみたちもいつてしまいました。すると、もみの木は、またひとりぼっちになったので、ためいきをつきながらいました。

「げんきのいい、小ねずみたちが、わたしをとりまいて、おもしろそうに、はなしをきいてくれたのは、ほんとにゆかいだったなあ。だが、それもおわりさ。でも今にここからはこびだされれば、せいぜいものをたのしくかんがえることだ。」

ところで、いつそんなことになったでしょうか。

なるほど、あくる朝、大勢おおぜいしてがたがた、ものおきをかたづけにきました。そして箱をどけて、もみの木をはこびだしました。それから、かなりらんぼうに床ゆかのうえになげだしました。やがてひとりの下男が、それをそのままはしごだんのほうへひきずっていきま

した。こうしてもみの木は、もういちど、日の目を見ることができました。

「さあ、また生きかえったぞ。」と、もみの木はおもいました。もみの木は、すずしい風に吹かれて、朝のお日さまの光にあたりました。——そこはほんとうに家のそと、にわのなかでした。いろいろなことが、目まぐるしいほど、はたで、どんどんおこつてくるので、もみの木はすっかり、じぶんのことをわすれてしまいました。ぐるりにはたくさん、目につくものがありました。このにわは、すぐ花ぞのにつづいていて、そこには、いろいろの花が、いっぱい咲いていました。ほんのりいいにおいのするばらが、ひくいかきねにからんでいましたし、ぼだいじゅも、ちょうど花ざかりでした。つばめたちは、その上をとびまわりながら、さえずっていました。

「びいちくち、びいちくち、うちのひとがかえつてきましたよ。」

けれどもそれは、もみの木のことはありませんでした。

「さあ、いよいよこれから、わたしは生きるのだぞ。」

と、うれしそうな声をだして、もみの木はおもいきり、枝をいっぱい伸ばしました。けれど、やれやれかわいそうに、その枝のさきは、がさがさに乾か**ら**びて、黄**い**ろくなっていました。そして、じぶんはにわのすみつこで、雑草や、いばらのなかに、ころがされて



いました。金紙きんがみの星はまだあたまのてっぺんについていました。そしてその星は、あかるいお日さまの光で、きらきらかがやいていました。

ところで、そのとき、にわには、あのクリスマス晩、この木のまわりをとびまわった、けんきのいいこどもたちが、あそんでいました。するとひとり、いちばんちいさい子がかけてきて、いきなり金の星を、もぎとってしまいました。

「ごらんよ。きたない、ふるいもみの木にくつついていたんだよ。」

その子はそうさげびながら、枝をふんづけましたから、枝はくつの下で、ぽきぽき音を立てました。

もみの木は、目のさめるようにうつくしい、花ぞののなかの花をみました。そしてみすばらしいじぶんのすがたを見まわしてみても、これならいっそものおきのくらかたすみにはうり出されていたほうが、よかったとおもいました。それからつづいて森のなかにいたときの、わかいじぶんのすがたを、目にうかべました。楽しかったクリスマス前の晩のことを、おもいだしました。でつくりもつくりさんのおはなしを、うれしそうにきいていた、小ねずみたちのことをおもいだしました。

「もうだめだ、もうだめだ。」と、かわいそうなもみの木はためいきをつきました。「た

のしめるときに、たのしんでおけばよかった。もうだめだ。もうだめだ。」

やがて、下男<sup>げなん</sup>が来て、もみの木を小さくおつて、ひとたばの薪<sup>まき</sup>につかねてしまいました。それから大きなゆわかしがまの下へつつこまれて、かつかと赤くもえました。もみの木はそのとき、ふかいためいきをつきました。そのためいきは、パチパチ弾丸<sup>だんがん</sup>のはじける音のようでした。ですから、そこらであそんでいるこどもたちは、みんなかけてきて、火のなかをのぞきこみながら、

「パチ、パチ、パチ。」と、まねをしました。

もみの木は、あいかわらず、ふかいためいきのかわりに、パチ、パチいいながら、森のなかの、夏のまひるのことや、星がかがやいている、冬の夜半<sup>よなか</sup>のことをおもっていました。またクリスマスの前晩のことや、たつたひとつきいて、しかも、そのとおりにおはなしのできるでつくりもつくりさんの、むかしばなしのことを、かんがえていました——するうち、木はもえきつてしまいました。

こどもたちは、やはり、にわであそんでいました。そのいちばん小さい子は、金の星をむねの上につけていました。その星は、もみの木が一生のうちで、いちばんたのしかった晩、あたまにつけていたものでした。けれど、いまはそれも、おしまいになりました。も

みの木も、そのおはなしも、おしまいになりました。おしまい。おしまい。さて、どんなおはなしも、そうしておしまいになっていくのです。







# 青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第二巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月15日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、\*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# もみの木

## GRANTRAEET

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>